たのである。ニーチェによる社会性を維持する諸概念への批判は、現実的な生に近接する道であったのではないだろうか。

ルドルフ・シュタイナーのキリスト観

西井 美穂

ルドルフ・シュタイナー (Rudolf Steiner 一八六一—一九二五) は日本では、シュタイナー教育の創設者として知られ、その教育を支えている思想は、一般に人智学 (Anthroposophie) と呼ばれている。それは人間が自らの叡智で、人間であることを見出すということを意味する。実践では評価されているものの、シュタイナーの思想はドイツでは、「精神科学 (Geisteswissenschaft)」という、見えないものをも実体として研究対象としているため、経験的実証的な科学からは「非科学的」と批判されている。日本においても、シュタイナー思想の神秘的側面が問題となっている。

しかし、実践活動の基盤となっているのが人智学思想であることを考えれば、「非科学的」だと決めつけ、厳密に吟味されないのはおかしな話だといわざるをえない。それ故、「神秘主義」という側面のみに焦点を当てるのではない、新しい視座による分析が必要であると考える。そのシュタイナー思想は、これまでの研究では、哲学的思索を中心とした前期思想は重要だとされながらも、研究対象となるのは、もっぱら神秘思想の後期思想であった。しかし、近年では前期思想と後期思想を連結させることを試みた研究も現れ、シュタイナー思想全体がもつ意味が厳密に検討されつつある。

前期と後期に通底するものを探求したときに問題になるのが、シュタイナーのキリスト観である。実際にはシュタイナーのキリスト論は厳密に検討されずに、「非正統的」と見做されたり、あるいは単にオカルト思想として片づけられてしまうのである。こうした状況においてシュタイナーのキリスト観を分析することは、シュタイナー思想の新たな側面に光を当て、幅広く議論を展開していくことができるのではないかと考える。

さて、シュタイナーのキリスト観であるが、シュタイナーの独自の聖書解釈は、歴史学者セオドア・ローザクから「キリスト教史においてもっとも異様なもの」(『意識の進化と神秘主義』)だと激しい批判をあびせられている。その「最も異様な」聖書解釈とは、如何なるものなのか。

一九〇二年、シュタイナーは神智学協会入会直前に行った講演『神秘的事実としてのキリスト教と古代の秘儀 (Das Christentum als mystische Tatsache und die Mysterien des Altertums)』において、古代ギリシアの密儀精神で見出される神性がキリスト教の源泉であると論じた。前半は、プラトン(紀元前四二八頃—三四八頃)の神秘思想を中心に、ヘラクレイトス(紀元前五三五—四七五)などプラトン以前の哲学者の思想を吟味し、古代ギリシアの哲学者にとって神秘的認識がいかに重要であったかを語っている。後半では、プラトン神秘思想がフイロン(二〇頃—四〇頃)を通してどのように福音書の成立に影響したかを述べ、「キリスト教はゆつくりと密儀から芽生え……密儀の叡智がキリスト教の言葉をまとう」と結論づけている。このような聖書解釈においてキリストは、一九〇八年の

『ヨハネ福音書講義 (Das Johannes-Evangelium)』で、キリストが「個別な自我に確かな自分を感じることができるような事柄を人々に提供した」とし、血縁の「愛」から霊的な人類「愛」へと「愛」を進化させたと述べている。また、一九一〇年に上梓された神秘主義的な著作の代表作である『神秘学概論 (Die Geheimwissenschaft im Umriss)』では「包括的な友愛の理想」として語られる。このキリストについての考察は、シユタイナーが一九一〇年から書き始めた『神秘劇四部作 (Vier Mysteriendramen)』において、善悪も含め、すべてを統合する「愛」の力として提示されたのである。「愛」をどのように人類に広げ、深化させていくかが、シユタイナーの課題であった。

二人称としての神——マルティン・ブーバーの神概念——

田島 卓

現代における神の諸問題を取り扱った『神の蝕』(一九五二)の冒頭で、ブーバーはふたつの対話の思い出を語っている。最初の対話では、彼は無神論者に対し、我々の知覚を支える普遍的／根源的な場所としての神を説く。たとえば色彩は光の振動と、我々の受容器官の「出会い」によって生じるのだから、その出会いの場所として、神が要請されるといふのだ。このことによつて、ブーバーは無神論者に神の存在を承服させることに成功した。だが、ブーバー自身はこれを失敗と受けとめていゝる。なぜなら、このように示される神は、所詮「哲学者の神」でしかないからだ。これに対して、もうひとつの対話で、ブーバーは、そのつど、各人が己の深みから、「あなた」と呼びか

ける、そのような神について語っている。この二つの対話は、それぞれ二つの神概念を代表しているように思われる。場所論的神と人格主義的神である。

ふたつの対話は、フリードマンによれば、前者が一九二〇年から一九二一年、後者が一九二二年に、パウル・ナートルプとの間でなされている。したがって、ここで示されているような神理解は、『我と汝』(一九二三)以降のブーバーの神理解を一貫して規定しているものと解してさしつかえない。本発表の目的は、以上のことを踏まえて、ブーバーが「永遠の汝」として示した神を理解し直す、ひとつの可能性を試みることである。

興味深いことに、『神の蝕』で示されたような二つの神概念は、他の著作の中で、世界概念として示されたものと親近性を持つている。『神の蝕』における最初の対話では、「出会いによる知覚」によつて世界が構成されると説かれていたが、これと同じモチーフが、ただし神に言及しないかたちで、『人間とその形像物』(一九五五)のなかに現れている。

一方、『対話』(一九三〇)中の「責任」という節では、独特な世界の捉え方が展開されている。他者と共有されえない世界という考え方である。この独特な世界概念は二人称関係構造の特徴である排他性(あるいは専一性)という契機に着目するならば、理解しやすい。ここで示されているのは二人称的世界概念だと理解できる。

してみれば、「出会いによる知覚」によつて構成された世界は、たしかに存在者同士が「出会い」うるという特性を備えた人間存在に固有の世界である。けれども、この世界は、とりわ